

平成29年度老人保健健康増進等事業

認知症グループホームにおけるグループホームケアの効果・評価に関する
調査研究事業

公益社団法人日本認知症グループホーム協会

1. 事業目的

本調査研究事業においては、認知症グループホームケアの効果を立証することを目的とし、効果指標には認知症の行動・心理症状（BPSD）と生活の質（QOL）をあげ、全国的な大規模調査により、既存入居者群を対照群とみなし、新規入居者で経過とともにBPSDが低減し、QOLが高まる過程を定量的評価尺度で客観的に実証する調査研究を立案した。

2. 事業結果の概要

1) 時点間比較（既存入居者群、新規入居者群）

既存入居者群は、基本的に2回の調査間の3か月間にわたって、BPSD（NPI-NH）と介護負担度（NPI-D）は低値で、客観的QOL（QOL-D短縮版）は高い状態で安定していた。新規入居者群は、入居から1か月後（113例）でBPSD、介護負担度、客観的QOLの全ての効果指標が有意に改善した。さらに入居前の状態も評価できた例では、1か月後（68例）や3か月後（40例）にこれらの指標が有意に改善していた。入居前のBPSDが入居により低減し、さらに1か月後には落ち着いた状態に近づき、リロケーションダメージ（入居による悪化）は表れなかった。同時に、経過とともにQOLが有意に向上した。

2) 比較分析

既存入居者群を対照群（496人）として新規入居者群（71例）との間で、時間経過との交互作用を検討した。いずれの効果指標も、初回調査とその3か月後調査の2時点間での変化を、繰り返し測定のある分散分析で統計学的に検討した。その結果、BPSD（NPI-NH）は、新規入居者群で 13.0 ± 13.6 点から3か月後に 9.7 ± 10.2 点と有意な低減（ $p < 0.01$ ）がみられた一方で、既存入居者群は有意な変化がなく、BPSDは新規入居者群のみが有意に改善した。しかし、NPI-NHの交互作用は $F(1, 565) = 3.835$, $p = 0.051$ と統計学的有意水準（0.05）にはわずかに届かなかった。介護負担度（NPI-D）は、新規入居者群で 6.2 ± 6.3 点から3か月後に 4.7 ± 5.4 点と有意な低減がみられ（ $p = 0.003$ ）、既存入居者群では有意な変化がなかった。NPI-Dの交互作用は $F(1, 565) = 8.455$, $p = 0.004$ と有意だった。客観的QOL（QOL-D短縮版）については、新規入居者群で 27.3 ± 5.5 点から3か月後に 29.1 ± 4.7 点と有意に改善していた（ $p < 0.001$ ）。一方、既存入居者群のQOLは、 28.4 ± 5.1 点から3か月後に 27.9 ± 5.1 点とわずかだが有意に低下した（ $p = 0.003$ ）。QOLの交互作用は $F(1, 565) = 19.835$, $p < 0.001$ と有意な交互作用がみられた。既存入居者群は、3か月間に認知症が進行して要介護度も悪化傾向が見られ、客観的QOLが低下した。一方、新規入居者群では3か月でQOLが向上した。

3. 結論

認知症グループホーム新規入居者群においては、BPSD、介護負担度、QOLのいずれもが経時的に改善し、既存入居者の状態に近づいた。一方、既存入居者群（3か月以上入居継続）ではBPSDと介護負担度は3か月後に有意な変化を示さず、QOLは3か月後にわずかに低下したが、いずれの指標も良好な状態を保った。この結果は、認知症グループホームケアの有効性を客観的に示す根拠の一つとなる。